

六章 たかすの殿様の由来と系図

— 鷺見氏一九代 —

この系図の中から主な人物を県史・町村史の中に記述してある事柄から抜き出してみました。ただし、重複記事は一方の資料を採用しました。

一代頼保の時代

- ・永暦元年(一一六〇)大鷺白山神社に社領二石四斗を寄進しました。
- ・文治元年(一一八五)頼朝から地頭に補せられ、美濃国芥見庄及び鷺見郷を支配します。
- ・鷺見という家名を賜ります。
- ・元久元年(一一〇四)向鷺見で死去。

二代重保の時代

郡上太郎

- ・建仁年間(一一〇一〜一一〇三)に美濃国岩滝郷の小島三郎が乱暴したので將軍は遠江守(北条時政)に指図して頼保の所領を安堵させました。この判決文の袖書に「この重保は相伝の御家人故云々」とあることから、鷺見氏は幕府の御家人として鷺見郷を相伝していたことが分かります。
- ・建仁二年(一一〇二)向鷺見で死去しました。

三代家保の時代

郡上三郎

- ・承久三年七月(一一二二)土岐家より所領安堵されます。
- ・重保の子を家保といい、武勇に優れ、承久の乱では幕府の軍に従って戦い、功によって承久三年七月鷺見郷下司として土岐家より安堵状を得ます。
- ・鷺見城築城(城山・海拔六四五m、平地より九五m)します。
- ・貞永元年(一一三二)死去しました。

四代保吉の時代

郡上太郎

- ・弘安八年(一一八五)京都大番役を勤めます。

五代諸保の時代

郡上藤三郎

- ・弘安八年、京都大番役を勤めます。

六代長保の時代

郡上彦三郎

- ・弘安八年、諸保の後、京都大番役を三ヶ月間勤めます。
- ・保吉の子郡上彦三郎長保、その子藤三郎忠保がいて、後醍醐天皇方に加わって奮戦し感状を賜っています。

七代忠保の時代

郡上藤三郎、長山彦五郎

- ・鷺見苗字を宣下(天皇の命を伝えること)されました。
- ・元弘三年(一一三三)と建武二年(一一三五)に足利尊氏方とし

て奮戦しています。

・建武二年十一月足利尊氏は後醍醐天皇に反旗を掲げて鎌倉に拠っています。その時、鷲見藤三郎忠保は美濃におり、土岐頼遠の勧めによつて武家方となり参戦しました。以来、忠保は土岐氏の陣営に属し、関・山県北野で戦い、方県郡の八代、因幡郡の城田寺等に転戦し、建武四年(一三三七)三月には戦功によつて鷲見郷の地頭に補せられています。忠保は北畠頭家の西上に際して青野原合戦にも参加したと思われます。

・建武三年忠保と東常頭が戦います(向鷲見城の戦)。鷲見貞保を人質に出し和睦します。(濃北一覽にはこのように記してありますが、応永年間の間違いではないか?)

・康永二年(一二四三)鷲見城で死去しました。

八代保憲の時代

鷲見藤四郎

・康永二年忠保の弟、保憲が地頭職を継ぎ、鷲見城主となります。(忠保の子干保があとを継ぎますが、幼少のため忠保の弟藤四郎保憲が後見人となります)。

・観応元年(一三五〇)足利尊氏と弟直義の仲が悪くなります(観応の擾乱)。

・観応元年足利直義の招きに応じて、直義に従い感状を受けています。

・鷲見保憲は観応元年十一月足利直義の招きに応じ、高師直に

対抗し、また直義が足利義詮と不和を生じたときも直義側に味方しています。

・観応二年(一三五二)足利直義方として戦功を上げます。

・保憲は晩年、狩猟と土地開発に力を注ぎ、櫛谷を開発し、そこを子孫に継がせました。

・応安三年(一三七〇)一〇月、死去しました。

九代干保の時代

長山彦五郎

・鷲見氏は干保(加賀丸・論人・禅峰)以後、一族の人が次第に多くなり、幾流にも分かれました。

・忠保の子は、加賀丸といい、足利尊氏・土岐氏方につき、保憲は直義方につき、一族敵対することになります。

・元中四年(一三八七)、加賀丸は土岐頼益につき、明德元年(一三九〇)に揖斐小島にて土岐康行軍と戦い、さらに斎藤氏に味方します。

・明德二年幕府は加賀丸の軍功(土岐康行の乱鎮定)を賞して郡上郡の内、鷲見郷河西、河東の地頭職を今まで通り安堵されました。その所領は鷲見郷、東前谷、牛道郷の一部、越前穴馬の一部です。

・明德二年二日町にいた東氏一族の安東三郎が鷲見郷をうかがっています。

・干保も明德三年(一三九二)ころ中務少輔に昇るといふ実力

でしたが、これは、芥見庄長山には広い耕地があつて、鷺見郷のような峡谷の寒冷地とは比べものにならないような経済基盤を持ち、鷺見氏の軍事力を支えていたことが分かります。

- ・室町幕府が地頭職を氏保にすることに命じます。氏保は齋藤氏につきます。

- ・応永二四年(二四一七)、鷺見城で死去しました。

一〇代氏保の時代

郡上彦五郎、長山彦五郎

- ・応永一六年(二四〇九)氏保と東益之とが戦いますが、土岐頼益のはからいで和議が成立します。

- ・応永二二年(二四一五)氏保は東益之と共に伊勢へ出陣しています。

一一代行保の時代

郡上(長山)彦六

- ・文安元年(二四四四)氏保死去しましたので、行保が鷺見城主になります。

- ・行保は自ら出陣して中央の戦禍に投ずることはないのですが、その子ども達には、多くの戦歴が有りました。

- ・明応三年(一四九三)行保死去し、三男保兼が鷺見城の後を取ります。保兼に跡継ぎがいなかったので直重(保重)の子保光が後を継ぎ(養子)ます。

- ・行保の子伊予守保照は庶子であったため、家督を継がず弟の

保兼に譲り、劍村に一城を築いたとありますが(阿千葉城または劍目城)、行保の子八右衛門は「東家へ人質となり、後餌取家を継ぐ」とあることから、実は東氏が北方に対する守りとして保照を阿千葉城に居城させたと考えるべきでしょう。

- ・永正一一年(二五一四)保照、死去し、その子市兵衛貞保が阿千葉城を継ぎます。

一二代保兼の時代

- ・明応三年行保の死後、三男保兼が城主となり、保兼に子がないので北野城主直重(保重)の子保光が城主となります。

一三代保光の時代

- ・直保の弟大学助保光は義竜・竜興に仕えていましたが、稲葉城落城後は、子の定重とともに郡上へ帰り、鷺見城主となります。

- ・保光は義竜に従って稲葉城にいましたが、義竜の死後、竜興に従い、美作守と称しました。永禄一〇年(二五六七)信長が稲葉山に迫ったので、竜興は長島に退き、保光とその子定重は高富を経て郡上に帰りました。保光の二男次定は龍興に従って長島に至り、さらに近江に転戦しています。

- ・天正七年(二五七九)保光は死去し、その子孫の多くは岐阜に出て、斎藤氏及び織田氏に仕えました。

・鷲見城には保照の甥の保直が継ぎ、居城して遠藤氏に仕えていました。

貞保の時代 (阿千葉城主)

・天文一〇年(一五四一)篠脇城主東常慶が阿千葉城主鷲見貞保を滅ぼさんと企てたため、貞保は餌取広綱に幼児千代丸(後の正保)を託し牧谷へ逃し、自殺してしまいます。

・この頃になると、鷲見氏は地の利を得ず、さらに將軍の威令が行われず、祖父以来の領土を保つことはできず、多くは勢力のある東氏を頼って領土の保安を願いました。

正保の時代

・牧谷で成長し、織田信長に家の再興を願い出て、信長は遠藤盛数に使者を使って保護させました。盛数は、千代丸と餌取広綱を郡上に招き、大島村を所領させました。千代丸は鷲見兵助正保と名乗り遠藤氏に仕えましたが、遠藤氏が東濃へ移封のとき帰農しました。

一四代保直の時代

・永祿二年(二五五九)鷲見兵庫(保直)と鷲見弥平治(大間見居城)は、遠藤盛数に従い八幡山(東殿山)の戦いに参戦しました。

一五代保義の時代

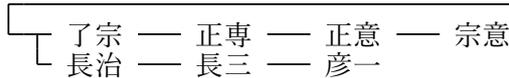
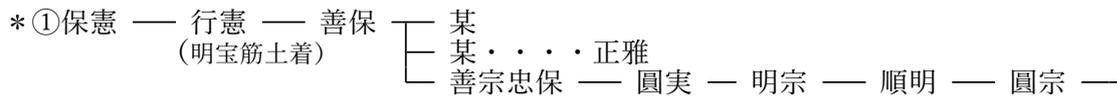
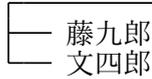
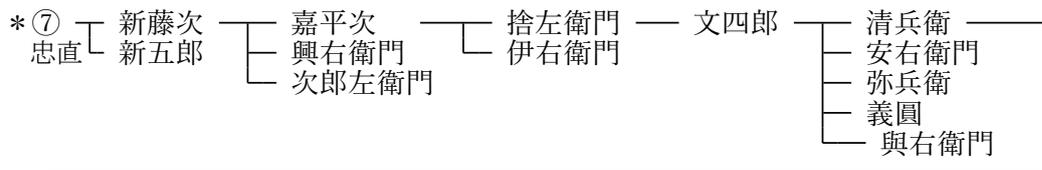
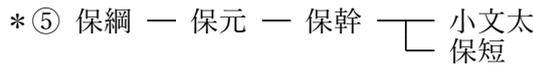
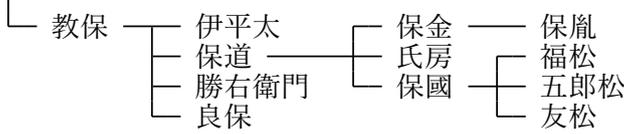
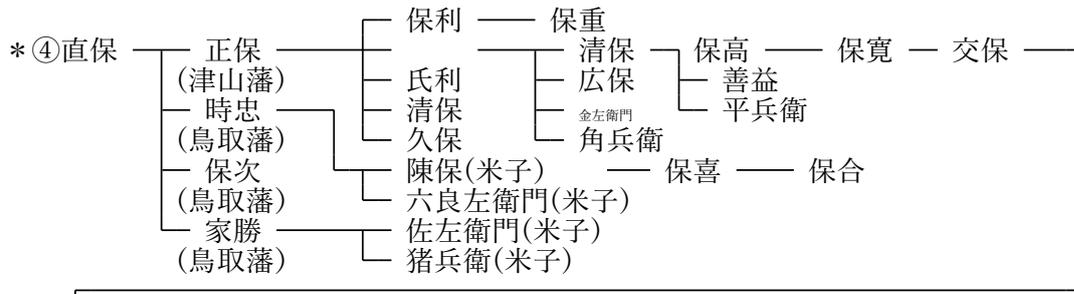
・保直の子で鷲見城にいた鷲見忠左衛門保義は、遠藤家の家老(四百石)として遠藤慶隆・金森可重軍に従軍して一方の將となり、八幡城下柳町に移居していました。しかし、慶隆が加茂郡へ転封されたので一緒に行き、八幡城主は稲葉貞通になりました。一二年後の八幡城の戦いで再び遠藤慶隆が城主となりました。

・慶長五年(二六〇〇)、八幡城の戦いで稲葉貞通軍に遠藤慶隆軍が急襲され、鷲見忠左衛門は戦死し、後に遠藤常友がこのとき五人の戦死者を弔う碑を愛宕(公園)に建立します。これを五人塚といいます。

・慶長五年、忠左衛門の第二子忠三郎も小坂歩岐の戦いで戦死二二才。

・忠左衛門の死後、正ヶ洞村餌取弾正が一族と共に城を乗っ取ります。弾正は行保の孫で八右衛門の子です。(鷲見大鑑)





北野城主一代目・鷺見直重 (保重)

(一四七八〜一五一〇の三三年間)

・鷺見城主行保の子に保重があります。美濃国の中心も戦国時代に入るに従って、岐阜地方が中心となったので、保重は山県郡北野に移り住み(文明年間の頃か)子孫代々土岐家に仕えました。

・元来郡上鷺見郷は中心から遠く離れており、美濃中央の勢力に列するには不便ですから、当時鷺見郷を出て、北野に居城したのです。その後、長享年中(一四八七〜八八)尾張小熊にも所領を得ます。

・延徳年間(一四八九〜九一)に鷺見直重は、守護土岐成頼の北野天満宮への寄進地多芸村及び將軍足利義満寄進の芥見庄日野郷の年貢徴収金を天満宮へ納めています。直重は土岐家の有力な被官とみられます。

・明応九年(一五〇〇)保重は大智寺を再興し、一八石八斗を寄進しています。

・鷺見行保の次男美作守保重は、文明の頃土岐成頼の武将として、弟新左衛門と共に各所に転戦し、山県郡北野城にいました。明応の乱に土岐成頼に味方して山県郡高富に百貫の所領を得ました。船田の乱にも土岐氏に味方しましたが、永正七年(一五一

○)に至って齋藤利良との間に隙が生じ、齋藤氏は急に鷺見氏を攻めました。北野城は寡兵で齋藤勢を防ぐことが出来ませんでした。美作守保重は自害しようとしたが、領民や家臣に押しとどめられ、最後の酒宴を張り、その後大智寺から一町ばかり行った林の中で切腹しました。殉死する者一三人、大智寺に美作守保重の五輪塔と殉死者一三人の碑が建てられています。

北野城主二代目・鷺見保定

(二五二一〜二五二七の七年間)

・土岐政房は保重の子保定を再び北野城主としましたが、齋藤利良は永正一四年(二五二七)土岐政房・頼芸を除こうとして土岐政頼を立てて合戦、保定は政房方として出陣し、山県郡赤尾で討ち死にします。

北野城主三代目・鷺見直保(直康)

(二五二八〜四七の三〇年間)

・土岐政房の子頼芸に仕え、齋藤道三と大桑城で戦います。子孫は高富に住みます。
・永正一六年(二五二八)土岐政房は大勝し、保重の次男の直保を北野城主にしました。直保は三〇年にわたり政房・頼芸に仕えました。

・天文七年(二五三八)直保、北野城を修築します。

・天文一六年(二五四七)十一月、齋藤道三が大桑城の頼芸を攻めたとき、直保は大桑城で奮戦し、討死にしました。土岐頼芸

は尾張に逃れました。

北野城主四代目・鷺見忠直

(二五五一〜二五五六の六年間)

・天文二〇年(二五五二)三月一日保直の従兄弟鷺見新藤治忠直が北野城を継ぎます。

・忠直は、一時方県郡木田に住んでいましたが、齋藤道三に迎えられて北野城に帰りました。弘治の乱、すなわち道三とその子義龍の戦いの時、道三は北野城に籠もっていましたが、北野城を出て長良川の戦いで戦死し、新藤治忠直もまた戦死して、北野城は兵火にあっています。

・鷺見氏は守護土岐氏に従い北野城を拠点にして活躍しましたが、土岐氏滅亡と前後して、その勢力は各地に分散してしまいました。なお高富の廣嚴寺は鷺見氏一門の菩提寺であります。

・鷺見忠直の弟大学助保光はこの戦いに義龍に従い稲葉山城にありましたが、義龍死後は龍興に仕えて美作守と称しました。龍興の滅亡によって大学助その子定重は高富を経て郡上に帰り、その子孫に宇大夫保幹という者がおり、藤井の松平忠周に仕え信州上田に住み、上田の鷺見氏の祖となります。

鷺見保能

・穴洞の鷺見伝右衛門の祖。子孫は令和五年現在において繁栄しています。

鷲見伝次右衛門(二郎八)

・向鷲見の鷲見氏の祖。子孫は名古屋の方面で、現在も繁栄しています。

鷲見十左衛門

・大島村の鷲見氏の祖。子孫は現在においても繁栄しています。

鷲見五郎兵衛直保

・直保の孫、最初高富にいたが、池田信輝及び輝政に仕え、天正の末頃三州吉田城に住んで、慶長五年の関ヶ原の戦いにおいて輝政に従い岐阜城を攻め、次いで関ヶ原合戦にのぞみ、役後、播州姫路に移り、一千余石を領します。

・慶長八年(一六〇三)輝政死去後は池田忠雄に仕え、備前岡山に住みます。

・寛永九年(一六三二)池田光仲に従って鳥取に至り、さらに伯州米子に移り、寛永一〇年(一六三三)十一月死去。

・直保の子孫は米子にいましたが、数代後鳥取に移住しました。同地の鷲見氏の祖。

鷲見猪衛門正保

・関ヶ原の戦いに小早川秀秋に従い、備前岡山に到ります。三五〇石を領します。

・慶長七年小早川秀秋死去すると、家は断絶となり、正保は高富に帰り、その後、作州津山に到り、森忠正に仕え、二百石を領します。

・正保元年(一六四四)病となり、正保四年に家督を三男次郎左衛門に譲り、高富に帰ります。

・慶安五年(一六五二)四月死去。

鷲見久左衛門次久

・保光の孫、久左衛門次久は慶長五年八月岐阜城落城後に、信州に到り、小諸城主仙石秀久に仕え、佐久郡において七百貫を領します。(マンガ『センゴク権兵衛』に登場します)

・その子九郎右衛門次吉は仙石秀久及び秀政に仕え、家禄三三〇貫を領します。

・寛文九年(一六六九)信州上田で死去。上田鷲見の祖。

鷲見嘉平次

・鷲見新藤次忠直の子孫で弘治の乱後、稲葉氏に仕え、八幡城を守りましたが、稲葉氏豊後へ移封後、所領のある本巢郡神海に帰ります。

・その数代子孫に上総国武射郡本須賀村の医者になった者もあり、同村の鷲見氏の祖となります。